【修士論文研究ノート】

可視的自然か不可視的自然か？

―ホワイトヘッドによる自然二元分裂理論批判の成否をめぐって―

遠藤 浩史

序論
第一章　自然二元分裂理論
　第一節　「現れである自然」と「原因となる自然」
　第二章　自然内部での相互作用と心と自然の因果作用
第二章　自然二元分裂理論への批判
　第一節　批判の根拠
　第二節　科学的唯物論とその理論への批判
第三章　ホワイトヘッドの自然観
　第一節　自然二元分裂理論を克服するには
　第二節　出来事
　第三節　延長的抽象化の方法
　第四節　対象
第四章　ホワイトヘッドによる自然二元分裂理論批判の成否
　第一節　ホワイトヘッドの方向性
　第二節　対象間の関係性
終章

『過程と実在』におけるホワイトヘッドの試みは、われわれが経験するすべてのことがらを「活動的存在」(actual entity)という実在物のみによって一般化し、それらが織り成す体系を構築することによって世界を表現することであった。そのような形而上学的関心を抱く前に、彼は自然科学という見地からわれわれの経験の一般化を試みている。そこでの目的は、二つに分割させられた自然を統一させることであった。世界を一般化させるには、まず、世界についての一元的な記述が条件となる。そこで、彼は「出来事」(event)という概念によって、包括された一つのものとしての

自然を記述しようとしたのである。本論の研究対象は、上述したような彼の自然科学的探究である。自然を二つに分割させられたものとみなす「自然二元分裂理論」(theories of the bifurcation of nature)、そして、その理論に対する批判として彼が提示した自然観を明らかにした後で、自然二元分裂理論批判の成否を検討することを本論の目的とする。

本論全体の議論の展開は以下の通りである。序論に続く第一章では、自然二元分裂理論がいかなる理論であるかを明らかにする。それは、直接的な知覚によって得られる「木々の緑、小鳥たちの囀り、太陽の暖かさ、椅子の堅さ、およびビロードの感触」などといった感覚与件を、決して知覚には現れてこないような「分子だとか、電子など」を客観的実在として措定することによって説明しようという理論である。この理論では、前者は「現れである自然」(apparent nature)、後者は「(その現れの)原因となる自然」(causal nature)と呼ばれ、両者は知覚における因果関係で結ばれることとなる。知覚の原因(原因となる自然)と結果(現れである自然)といったように、自然を二つのものに分割させられたものとみなす自然観が自然二元分裂理論である。

続く第二章では、その理論に対するホワイトヘッドの批判の根拠を明らかにする。それは次のように要約される。自然二元分裂理論は、知覚の因果関係に基づいて自然を記述しようとしている。彼によれば、知覚認識は「究極的」であるので、われわれはそれについて「何を」という仕方で記述しうるに過ぎず、「何故に」という仕方でその原因をつきとめることはできないのだという。ゆえに、知覚認識の因果関係に基づいた自然記述は不可能となる。自然二元分裂理論が有するこのような欠陥を克服するために、ホワイトヘッドは、知覚認識の因果関係にではなく、知覚認識の対象となる事物の性格に基づいた自然記述を試みる。

第三章は、ホワイトヘッドの自然観についての考察となる。分子や電子などを実在とする自然二元分裂理論に対して、ホワイトヘッドが唯一の実在と認めたのは、「知覚的に認識される、われわれの前にある自然」であった。彼によれば、われわれの知覚認識にとってのもっとも具体的なもの、すなわちわれわれの知覚経験を構成する一般的事実は、「なにものかが推移しつつあること」であるとされ、その推移しつつあるなにものかは、いまだ識別されえないような場との関係性の認識によって識別された場である出来事とされた。この出来事こそが「知覚的に認識される、われわれの前にある自然」となる。そして、「持続なき瞬時」や「延長なき点」といった物理

学や幾何学で前提とされる概念は、「超えて延長する」という諸出来事間の延長関係に基づいた「延長的抽象化の方法」(method of extensive abstraction)という手続きによって導出されることになるのだが、この手続きによって先に挙げた諸概念を導出するためには、出来事の境界が確定されなければならない。この役割を果たす概念が、決して推移することなく一定期間を通じて自己同一性を保持する「対象」(object)という概念であった。この非時間的な対象という概念は、「状況」という関係で出来事と結ばれることによってはじめて時間の中に存在することになり、それによって出来事は他の出来事から区別されうるような性格を獲得し、境界づけられることになる。以上が自然二元分裂理論に対してホワイトヘッドが提示した自然観の概観である。「知覚的に認識される、われわれの前にある自然」は、対象という概念と関係づけられた出来事で表現されることになる。

続く第四章は、第三章で明らかにされたホワイトヘッドの自然観が自然二元分裂理論を克服しえているのか、彼の自然二元分裂理論批判の成否についての考察となる。その成否を問うには、「知覚的に認識される、われわれの前にある自然」を実在とみなす彼が、分子や電子などをどのようなものと考えているのかについての検討が必要となる。そこで、対象間の関係性についての議論となった。対象は、「個々の色、個々の音、個々の香り、あるいは、個々の触れ具合など」に対応する「感覚対象」(sense-object)、「椅子やテーブル、木立ちなど」の一般的な「もの」に対応する「知覚対象」(perceptual object)、「分子や電子など」に対応する「科学的対象」(scientific object)などといったタイプに分類される。そして、それら三種類の対象の間には、感覚対象が基底とって形成される上昇的階層関係が見出されるという。われわれは、感覚対象と関係づけられた出来事のうちに、知覚対象(物理対象)を認知することができ、さらには、その知覚対象(物理対象)が関係づけられた出来事－それは感覚対象が関係づけられた出来事と同一のものである－に、科学的対象を認知することができるのである。このように、彼の自然観にしたがえば、感覚対象も科学的対象も、ともに出来事の内に見出されることになる。「知覚的に認識される、われわれの前にある自然」を唯一存在する自然と認める彼にとっては、感覚対象と関係づけられた出来事が唯一の実在なのであり、分子や電子などといった概念は、そこから「延長的抽象化の方法」という手続きによって抽象化されることで得られるにすぎないものとなるのである。

しかしながら、「対象」という非時間的概念を用いた自然記述は、自然科学的探究ではなく、形而上学的探求なのではないかといった反論が想定されうる。だが、彼が批判したのは知覚認識の因果関係に基づいて自然を記述すること、そして、その際に決して知覚しえないような分子や電子などといった「幻想」を実在として措定することであって、「われわれが抱いている実在概念を最高の完全さでもって示す」ことを目的とする形而上学そのものは否定されてはいない。「対象」という概念は、決してそれ単独では実在とはなりえない、上述された目的を果たすために導入された概念なのである。よって、この反論は斥けられることになる。したがって、ホワイトヘッドの自然観によって、自然二元分裂理論は見事に克服されているといえるのではないだろうか。

（えんどう・ひろし　筑波大学大学院人文社会科学研究科在学）